日野山の閑居

古文／誰でも古典塾

名前（　　）　日づけ（　／　）　できた数（　／28）

使い方　本文を声に出して読んでから、傍線の番号を手がかりに解きます。**この話の山は「ぬ」の識別（打消と完了）、反語「何につけてか〜ん」、二重否定「なきにしもあらず」、そして庵の暮らしにこめた仏道と和歌・音楽**です。この確認テストは「すべて、あられぬ世を」から「なきにしもあらず」までを扱い、庵の広さとつくりを述べた部分は中略しています。

あらすじ＝生きにくい世を三十年あまりがまんして過ごした作者は、自分の運のつたなさを悟って五十歳の春に出家する。妻子も官位もないので、この世に心残りはない。大原山で五年を過ごしたのち、六十歳ごろ、日野山の奥に小さな庵を結ぶ。庵には阿弥陀の絵像や法華経とともに、和歌・音楽の書物や折りたためる琴・琵琶を置く。まわりには水を引く懸樋やたきぎの拾える林があり、西の見晴らしは極楽浄土を思うよりどころにもなる。

一　次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

すべて、①あられぬ世を②念じ過ぐしつつ、心を悩ませること、三十余年なり。その間、折々（をりをり）のたがひめ、おのづから③短き運を悟りぬ。すなはち、五十（いそぢ）の春を迎へて、家を出（い）で、④世を背（そむ）けり。もとより妻子なければ、⑤捨てがたきよすがもなし。身に官禄（くわんろく）あらず、⑥何につけてか執（しふ）を留（とど）めん。むなしく大原山（おほはらやま）の雲に臥（ふ）して、また⑦五（いつ）かへりの春秋をなん経（へ）にける。

ここに、⑧六十（むそぢ）の露消えがたに及びて、さらに末葉（すゑば）の宿りを結べることあり。（中略）

いま、日野山（ひのやま）の奥に⑨跡を隠してのち、東に三尺余りの庇（ひさし）をさして、柴（しば）折りくぶるよすがとす。南、竹の簀子（すのこ）を敷き、その西に閼伽棚（あかだな）を作り、北に寄せて障子（しやうじ）を隔てて阿弥陀（あみだ）の絵像（ゑざう）を安置し、そばに普賢（ふげん）をかき、前に法華経（ほけきやう）を置けり。東の際（きは）に蕨（わらび）のほどろを敷きて、夜の床とす。⑩西南に竹の吊り棚を構へて、黒き皮籠（かはご）三合を置けり。すなはち、和歌・管弦（くわんげん）・往生要集（わうじやうえうしふ）ごときの抄物（せうもつ）を入れたり。かたはらに、琴・琵琶（びは）おのおの一張を立つ。いはゆる⑪折琴（をりごと）・継琵琶（つぎびは）これなり。⑫仮の庵（いほり）のありやう、かくのごとし。

その所のさまを言はば、南に懸樋（かけひ）あり。岩を立てて水をためたり。⑬林の木近ければ、爪木（つまぎ）を拾ふに乏（とも）しからず。名を音羽山（おとはやま）といふ。まさきのかづら、跡埋（うづ）めり。⑭谷しげけれど、西晴れたり。⑮観念（くわんねん）のたより、なきにしもあらず。

語注　あられぬ世＝生きにくい世の中。念ず＝がまんする。こらえる。たがひめ＝くいちがい。思いどおりにならないこと。五十（いそぢ）・六十（むそぢ）＝五十歳・六十歳。官禄＝官位と、それにともなう給与（俸禄）。執＝執着。ものごとに心がとらわれること。大原山＝京都の北の山里、大原の山。かへり＝回数を表す語。露＝はかなく消えやすい命のたとえ。末葉の宿り＝晩年の住まい。（中略）＝この間には、新しい庵の広さがわずか一丈（約三メートル）四方（＝方丈）で、組み立ててすぐよそへ移せるつくりであることが書かれている。日野山＝今の京都市伏見区日野のあたりの山。庇＝のき先に張り出した小さな屋根。簀子＝竹などをすき間をあけて並べた縁。閼伽棚＝仏に供える水（閼伽）や花を置く棚。障子＝部屋をしきる建具（ふすま・ついたての類）。阿弥陀＝阿弥陀仏。西方の極楽浄土にいるとされる仏。普賢をかき＝普賢菩薩の絵を掛け。「画き（描き）」と書いて、絵に描いたと読む教科書もある。蕨のほどろ＝わらびの穂がのびてほうけたもの。皮籠＝皮を張ったかご。管弦＝音楽。往生要集＝平安時代に源信が、極楽に生まれかわるための教えをまとめた書物。抄物＝書物の大事なところを書きぬいたもの。一張＝琴・琵琶を数える語。折琴・継琵琶＝折りたためる琴と、柄（え）を取りはずせる琵琶。懸樋＝水を引くためにかけわたした樋（とい）。爪木＝たきぎにする小枝。音羽山＝庵のあたりの山の名。本によっては「外山（とやま）」とする。まさきのかづら＝つる草の名。観念＝心を静めて、仏や極楽浄土のすがたを思い浮かべること。たより＝よりどころ。手がかり。※「仮の庵のありやう」を「仮の庵のありさま」とする本もある。

日野山の閑居

A　語句の意味と読み（1〜7）

（1）①「あられぬ世」の意味を書け。

（2）②「念じ過ぐしつつ」の「念ず」の意味を書け。

（3）④「世を背（そむ）けり」の「世を背く」の意味を書け。

（4）⑤「捨てがたきよすが」の「よすが」の意味を書け。

（5）⑨「跡を隠して」の意味を書け。

（6）⑩「西南」の読みを、歴史的仮名遣いのひらがなで書け。

（7）⑬「林の木近ければ、爪木（つまぎ）を拾ふに乏（とも）しからず」の「乏しからず」の意味を書け。

B　文法（8〜13）

（8）①「あられぬ世」の「れ」と「ぬ」について、文法的意味と活用形をそれぞれ書け。

（9）③「短き運を悟りぬ」の「ぬ」の文法的意味と活用形を書け。また、①「あられぬ」の「ぬ」とちがうものだと見分ける決め手を書け。

（10）⑥「何につけてか執（しふ）を留（とど）めん」の「か」の種類と、「ん」の文法的意味・活用形を書け。

（11）⑦「五（いつ）かへりの春秋をなん経（へ）にける」の「なん」の種類を答え、結びの語とその活用形を書け。

（12）⑭「谷しげけれど、西晴れたり」の「しげけれ」の品詞・活用の種類・活用形と、「ど」の働きを書け。

（13）⑮「観念（くわんねん）のたより、なきにしもあらず」の「に」と「し」の文法的説明をし、この表現全体がどういう言い方になっているかを書け。

C　主語・指す内容（14〜17）

（14）③「短き運を悟りぬ」で、自分の運のつたなさを悟ったのは誰か。また、何を通して悟ったのか、本文中から七字で抜き出して書け（ふりがなは数えない）。

（15）⑤「捨てがたきよすが」とは、ここでは具体的に何のことか。本文中から漢字二字で抜き出して書け。

（16）⑪「折琴（をりごと）・継琵琶（つぎびは）これなり」の「これ」は何を指すか。本文中から抜き出して書け。

（17）⑫「仮の庵（いほり）のありやう、かくのごとし」の「かく」は何を指すか。どこからどこまでの内容かを示して説明せよ。

D　口語訳（18〜21）

（18）⑥をふくむ「身に官禄（くわんろく）あらず、何につけてか執（しふ）を留（とど）めん」を口語訳せよ。

（19）⑦をふくむ「むなしく大原山（おほはらやま）の雲に臥（ふ）して、また五（いつ）かへりの春秋をなん経（へ）にける」を口語訳せよ。

（20）⑧をふくむ「ここに、六十（むそぢ）の露消えがたに及びて、さらに末葉（すゑば）の宿りを結べることあり」を口語訳せよ。

（21）⑮「観念（くわんねん）のたより、なきにしもあらず」を口語訳せよ。

E　内容・記述（22〜25）

（22）①「あられぬ世」とあるが、作者が④「世を背（そむ）け」る（出家する）に至ったのはなぜか。本文の言葉にそって説明せよ。

（23）⑥「何につけてか執（しふ）を留（とど）めん」と作者が言えるのはなぜか。本文から理由を二つ挙げて書け。

（24）⑫「仮の庵（いほり）のありやう、かくのごとし」とあるが、庵の中に置かれた品物を二つの種類に分けて挙げ、そこからうかがえる作者の暮らしを説明せよ。

（25）⑭「谷しげけれど、西晴れたり」と⑮「観念（くわんねん）のたより、なきにしもあらず」は、どのようにつながっているか。阿弥陀仏の信仰にふれて説明せよ。

F　文学史（本文全体をふまえて答える）（26〜28）

（26）この文章の出典『方丈記』の作者名、文学の種類（ジャンル）、成立した時代を書け。また、同じく随筆で、のちに兼好法師が書いた作品名も書け。

（27）書名『方丈記』の「方丈」とは何か。この書名がついたわけとあわせて書け。

（28）『方丈記』は「ゆく河の流れは絶えずして、」と始まる。これに続く部分を「。」まで書け。また、作品全体を貫くものの見方を漢字三字で書け。

【テスト直前チェック】この三つ　❶「ぬ」は直前の形で見分ける。①「あられぬ世」は未然形＋ぬ＝打消「ず」の連体形、③「悟りぬ」は連用形＋ぬ＝完了。下に名詞が続くか、文が切れるかも手がかり。 **❷「何につけてか〜ん」は反語、「なきにしもあらず」は二重否定。**⑥は「〜か、いや〜ない」まで、⑮は「ないわけではない」と訳さないと減点。 **❸記述は「仏道」と「和歌・音楽」の二本立て。**庵の品物は二種類に分け、⑭「西晴れたり」は西方の極楽浄土（阿弥陀仏）と結びつけて書く。

▸ 古文・漢文の参考書のおすすめ（楽天・Amazonのリンクつき）　kotennosennsei.com/koten-kyozai-review/　▸ 解説記事にもどる